

北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

No. 38 2015.9

特別寄稿	
新渡戸稲造と札幌遠友夜学校（第2回） 藤田 正一 -----	1
ヤマボウシに寄せて 木原 ゆり子 -----	6
木原 均先生と北大野球部 荒川 義人 -----	7
博物館訪問記	
横浜市こども植物園訪問記 星野 フサ -----	8
活動報告	
平成遠友夜学校 学習支援 卒業生徒の声 佐藤 悠 -----	9
平成遠友夜学校 苫前町での寺子屋 小山田 伸明 -----	10
“お宝新聞”教材化への飛躍 久末 進一 -----	11
お知らせ	
ボランティア・グループ活動拠点 沼田 勇美 -----	12

特別寄稿

新渡戸稲造と札幌遠友夜学校（第2回）

北海道大学獣医学研究科名誉教授 藤田 正一

この連載を始めるとき、第2回目からは、新渡戸稲造の人となりの完成と、遠友夜学校の精神史を時系列で書き起こすことを目論んでいた。しかし、最近のただならぬ世相が私の翻意を促した。現政権の施策の背景にある思想と、新渡戸の思想について語ろう。

最近のただならぬ世相

「特定秘密保護法の成立」、「武器輸出規制緩和」、「憲法9条の改定」を狙い、だめなら、平和安全法制と言う名の、名前にはそぐわない、憲法9条の戦争放棄違反を疑われる法案を強行採決する。これらに平行して、「法人税率引き下げ」、「消費増税」、「労働者派遣法改正」にも見られるような、「強者優遇・弱者冷遇による貧困層の増加と固定化を狙う政策」も次々に実施されて行く。徴兵制を敷く必要の無いように、貧乏人と言う兵隊予備軍を増やす。徴兵制はある意味平等だ

が、こうすれば富裕層の子弟は戦争にも行かないで済む。着々と改憲-戦争の準備が進んでいるように見える。

戦争のためには、こうした準備とともに必要なのが世論形成である。世論操作のためにはマスコミと教育のコントロールが一番だ。マスコミに対する現政権の口出しも厳しさを増している。「マスコミを懲らしめる」などと言う言葉が政治家の口から飛び出す。

そして、教育面では、「旧教育基本法の改定」、「国立大学の法人化（大学の目標達成度を国が審査し、評価に応じて予算を増減する仕組み、則ち、予算により大学をコントロールする仕組みが組込まれている）」、「教育委員会の弱体化と首長の教育権限の強化」、「国旗国歌強制」、「教科書に国の見解を入れろ」、「愛国心教育を中心とし

た道德教育の正規授業化」、「大学への国旗掲揚、国歌斉唱の要請」、「教員の政治的中立違反に罰則規定を検討」、「学校教育法及び国立大学法人法一部改定で大学経営協議会は過半数を学外者が占めることにする（大学の自治の剥奪）とともに、学長権限の強化、教授会の自治の剥奪」、「国立大学の存立目標をグループ分け（全国の国立大学法人大学を「地域活性化・特定分野重点支援」「特定分野重点支援」「世界最高水準の教育研究」の3つのグループに分ける）して競争的環境下で評価に基づき予算配分を決定する文部科学省方針」、「国立大学の文系学部の規模縮小」など、おびただしい数の教育への政治の干渉が矢継ぎ早に次々にあからさまになって来ている。今、日本の社会は、報道の自由、大学の自由は縮小され、着実に政権による教育統制・言論統制への道を進んでいる。

その上、財務省による国立大学授業料の値上げ検討である。「国立大入学者は富裕家庭の子どもも多いことから、私立大の授業料近くに値上げ」と言う口実であるが、貧しい家庭の子供は今の授業料が高くて大学には行けないのだ。結果、大学に行けるのは富裕家庭の子供だけになっている。貧しい者の進学は厳しくなるばかりだ。だからといって奨学金の返還義務を撤廃しようとはしない。欧米では奨学金（スカラシップ）と言えは返済義務の無いものを指す。無利子または低金利だが返還義務のあるものは文字通り学生ローンと呼ぶ。日本でも留学生に対する奨学金は返済義務が無いのだ。なぜ、自国の学生には返済義務を課すのだろうか。経済強者の方を向いた政権が恐れるのは、「知恵ある貧者」が増える事である。「知恵ある貧者」は政権転覆を目論むかもしれない。できるだけ貧者には低学歴でいてほしい、学歴がほしいなら、軍隊に入って優遇措置を得て進学しなさい。と言うのが政権の狙いであろう。

さらに、「防衛省による軍事研究助成」が発表された。教育への直接干渉ではないが、金に釣られて研究助成に応募する研究者も出てくることだろう。側面からの大学の良心、学者の良心の切り

崩しである。文部科学省による貧困な科学研究費のパイを奪い合う状況の中で、潤沢な研究助成金をちらつかせれば、そちらに応募する研究者も出て来るだろう事を狙った施策だ。

これらの政策が、マスコミで派手に取り上げられるものばかりでなく、綿密な計画の下であるかのように、同時平行で進んでいる。第一次安倍内閣では「戦後レジームからの脱却」がスローガンとして叫ばれた。安倍の著書「美しい国へ」ではナショナリズム（日本語に訳せば、国家主義）を賛美した。第二次安倍内閣でもそれを着々と実行し、国民に基軸をおく戦後民主主義を脱して、戦前の国家主義「日本を取り戻し」つつあるようだ。

何故私が、この稿で、現政権の施策をこれ程までにあげつらうのか、それは、これらが、ことごとく新渡戸の思想を狙い撃ちしたかのような施策であるからである。

新渡戸稲造の精神

こうした状況を見て、新渡戸なら何と言うであろうか。まず、彼はクエーカー（キリスト教フレンド派）教徒である。クエーカーは絶対的平和主義者で、良心的兵役拒否者である。それ故だけからではないが、満州事変勃発当時の国際情勢を見て「日本の国を危うくするのは、共産主義か軍部である。今はどちらかと言えば、軍部であると言わざるを得ない」と語って命まで狙われるバッシングを受けた「松山事件」の時のような発言をするかもしれない。

また、政治の教育への干渉については、彼が遠友夜学校を設立する1年前の1893（明治26）年に出版した英文小冊子、「札幌農学校」（新渡戸全集23巻にも掲載されている）の最後に、「政治は教育機関に対し、決して干渉してはならない。学問（Science）の王国は政治の支配に屈したり、世論の気まぐれな要求におもねたりするような事があってはならないからである。」との記述がある。実に120年以上前の発言であるが、いま、この状況にぴったりの発言ではなからうか。



新渡戸稲造
写真は原田英一氏遺族蔵

教育の政治からの自由を説いたこの精神は、新渡戸の弟子達が主流を占めた戦後の教育刷新委員会で制定された旧教育基本法第10条に、「教育は不当な支配に服すること無く、国民全体に対し、直接に責任を負って行われるべきものである」という形で取り入れられていた。第一次安倍内閣のもとで2006年に改定された新しい教育基本法では、同じような言い回しの第16条がある。「教育は不当な支配に服すること無く、この法律及び他の法律の定める所により行われるべきものであり、・・・」となっており、前半は同じであるが、後半が法律に則って教育するようにと規定されている。則ち、時の政権が自らの都合の良いように法律で教育を縛ることが出来るように変えられてしまった。旧法からの180度転換である。

旧教育基本法での「不当な支配」をする主体は政治や官僚を想定したものであったのに対し、現行教育基本法第16条のそれは、「日教組など」を想定したものであると、改定時の伊吹文部科学大臣が国会質疑で回答している。同じような文言であるが、前者は教育に対する政治の支配を否定し、後者は政治の支配を正当化する条項へとすり替えられているのだ。

「政治と教育の分離の重要性」は福沢諭吉も強調していたことである。彼は、教育は息の長いものである。政事（まつりごと）のように短期間で変更してよいものではない。政権を取るものが変わればすぐに教育も変えてよいと言うものではない。と説いている。まさに、「教育は百年の計」である。

因に、先ほどの伊吹文部科学大臣、教育基本法改定論議の中で、「あたらしい教育基本法には「武士道」にあるような新渡戸の精神を盛り込みたい」と発言し、旧基本法制定当時の教育刷新委員会の委員長・南原繁も、副委員長・安倍能成も、新渡戸の弟子であり、旧教育基本法の精神は新渡戸の教育思想ほぼそのものであったということを知らない不勉強ぶりを露呈した。

旧教育基本法第一条に教育の目的が書かれている：「教育は人格の完成を目指し、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値を尊び、勤労と責任を重んじ、自主的な精神に満ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行わなければならない。」これこそ、クラーク博士が持ち込み、新渡戸稲造らが熟成させた札幌農学校の教育精神そのままである。

教育基本法改正論議が終盤を迎えた2006年12月、北大総合博物館では旧教育基本法の改定に反対する声明を出した。当時この声明は相当に人気があって、すぐにインターネットにアップされ拡散された。今回のテーマに関連するので声明の全文を記載する。

「我々北海道大学総合博物館教員一同は、札幌農学校以来の北海道大学130年の歴史を振り返り、我が国の教育における民主主義の源流を形成したと評される輝かしい伝統と、先人の教え、そして、再び歩んではならない過ちの全てを俯瞰し、自由で民主的な社会の構築と、次代を担う若者の教育、学問研究の発展に資することを教員の使命と認識し、学問の自由、教育の独立など教育における重要理念を法制化した現行教育基本法の精神を尊重し、この精神に反する「改正」案には反対することを表明する。

本学は1876年に我が国最初で唯一の学位を授与する大学として発足し、自由な学風と、自主独立の精神を涵養する、極めて民主的な、人格の完成を目指す人間育成を教育の基本として我が国の大学教育の源流の一つを築いた。一方、我が国の官学教育においては、本学の自由な人間を造る民

主主義的教育は時の政権に支持されるには至らず、むしろ政権によって教育が支配され、逆らうものには弾圧が加えられた。札幌農学校に対しても、その自由な教育精神と、権力に対しても堂々と正義を主張する卒業生を輩出したが故に、時の政府からの圧力をうけ、幾度となく存立の危機に瀕してきた。国家主義教育が大学をはじめ初等中等教育をも支配し、教育が我が国を戦争へと導く精神的支柱の形成手段として使用されてしまったのである。

戦後、国家権力による教育への干渉がもたらす弊害への反省から、憲法で「学問の自由」が保証され、また、本学の教育精神を強く引き継ぐ、新渡戸稲造と内村鑑三の教え子たちを中心に草起された教育基本法には、学問の自由に加え、「教育の独立」の精神が唱われている。教育基本法第10条「教育は、不当な支配に服することなく…」は新渡戸稲造がその著作『札幌農学校』（英文 新渡戸稲造全集第23巻）に述べている言葉：「政治は決して教育機関に干渉してはならない」と同じ精神に由来する。

これらの精神に基づけば、大学における教育研究は、大学の良心に基づき、国民に対し直接に責任を負うものであり、普遍的真理の探究と教育と言うその使命から、その時々々の政権に支配されてしかるべき性質のものでは無い。

我らは、教育の崇高な目的を達成するために、そして、再び教育が国を戦争へと導く思想形成の手段として使用されると言う過ちをくり返さないために、学問教育の基本理念を宣言するものとして現行教育基本法を強く支持し、教育に対する政治的介入を可能にする教育基本法「改正」案に反対する。北海道大学総合博物館教員一同（館長・藤田正一）

と言うものであった。政治の教育への干渉がますます厳しくなる今でも十分に通用する議論である。

クラーク博士-札幌農学校-新渡戸稲造-旧教育基本法へと繋がる精神の流れはクラーク博士が出征した南北戦争の大義=アメリカ独立宣言-民主主義-ピューリタン精神へと遡ることが出来るの



矢内原忠雄
写真は Public Domain

であるが、これは別の機会にもう少し詳しく述べる事としよう。

新渡戸的教育精神 VS 国家主義的教育精神

これまで述べて来たような「札幌農学校-新渡戸の自由な教育精神」の流れは「国家主義的教育精神」と常に対峙して来た。1952年、東京大学五月祭で矢内原忠雄・元東大総長は「大学と社会」と題した講演をおこない、その中で次のように語っている。

「明治の初年において、日本の大学教育に二つの大きな中心があって、一つは東京大学で、一つは札幌農学校でありました。この二つの学校が日本の教育における国家主義と民主主義という二大思想の源流を作ったものである。大雑把に言ってそういうふうにいえると思うのです。日本の教育、少なくとも官学教育の二つの源流が東京と札幌から発しましたが、札幌から発したところの、人間を造るというリベラルな教育が主流となることが出来ず、東京大学に発したところの国家主義、国体論、皇室中心主義、そういうものが日本の教育の支配的な指導理念を形成した。その極、ついに太平洋戦争を引き起こし、敗戦後、日本の教育を作り直すという段階に、今なっておるのであります。」

初期の、「札幌農学校の民主主義的教育精神」対「東京大学の国家主義的教育精神」の構図は、新渡戸稲造が第一高等学校長となる事によって、大学間の教育精神の違いから、大学の枠を超え、「新渡戸的（民主主義的）教育精神」対「国家主

義的教育精神」の対立へと進んでいった。矢内原の言うように、主流となった国家主義的教育思想が国民を太平洋戦争へと向かわせた。敗戦後、アメリカから民主主義が導入され、旧来の国家主義が影を潜めると、札幌農学校-新渡戸の流れを汲むリベラリスト達が戦後民主主義教育を指導し、旧教育基本法を作成したのである。

そして、戦後70年の今、影を潜めていた国家主義者の末裔達が再び息を吹き返し、声を大にし、動きを活性化し始め、冒頭のような政策を実施している。新渡戸的な教育精神と国家主義的教育精神が再び攻守を逆転されつつあるように見える。

今日の世相と大学の使命

戦争準備諸法案に対しては、ようやく、大学人も声を上げ始めたが、大学の自治、教育への政治の干渉に対してはまだまだ声が小さい。戦後民主主義のリーダーで新渡戸の教え子の南原繁は、1951年 東大総長離任に当たって、「この6年間、及ばずながら私の最も戒心し（油断しないように努力すること）、努力し来たったところのものは、『学問の自由』『大学の自由』であったのである。これが確立されなかった所に、あるいはこれが脅かされた所に、今日の日本の悲劇が起こったと言っている。したがって、学問と大学の自由の確立は、一人我々大学人の最大関心事であるばかりでなく、実に、新日本建設の必須条件であるのである。」と語った。則ち、学問と大学の自由を守る事は民主主義の根幹を守る事である。このような認識は今日の大学人からは消え失せてしまったようだ。今のような時代に、極めて重要な認識であるのだが。

南原の次に東大総長となった、やはり新渡戸の教え子の矢内原忠雄も、「学問は政治のご都合に奉仕する侍女ではなく、政治を指導し、政治を批判する女王でなければならない。」また、学問的精神の属性には二つの属性があるとして、「1つは真理の探究を愛する精神、第2の属性は、真理のためには何物をも恐れぬということである。世の権力者の圧迫にも迫害にも屈せず、世間の評判



南原 繁
写真は Wikimedia Commons より

と人気をも恐れず、真を真とし、正を正として主張する精神であって、これはしばしば少数者の精神であるが、この精神の旺盛でないところには健全なデモクラシーはあり得ない。自由のための戦いはこの精神の産物である。この精神によってこそ真理の権威は世に維持される」と語っている。戦前から戦後の歴史的経緯の中で、実際に学問への弾圧と戦い、その時代を生きた知識人の体験に基づく信念に学ぶ所は多い。

南原も矢内原も新渡戸の教育精神に強い影響を受けた人々である。彼らの言葉こそ、新渡戸の精神を代弁していると言える。

今日の世相は、南原や矢内原が迫害を受け、札幌では遠友夜学校が閉鎖の余儀なくされた当時の状況へ着々と逆行しているように見受けられる。いや、戦前へ逆戻りと言うより、次の戦争へと突き進んでいる、今がその戦争の戦前であるようにも見えるのだ。

多少の誤解も含めた民間の新渡戸人気とは裏腹に、旧教育基本法改定や新渡戸五千人札消滅に象徴されるように、公的な新渡戸的な思想やものが次々と姿を消しつつある。札幌市の遠友夜学校記念室しかり、十和田市の新渡戸記念館しかり。これらが、現政権の政策、あるいはそれにすり寄る意図的なものではないと言い切れるであろうか。

既に見て来たごとく、新渡戸の思想はことごとく現政権の施策とは対立軸にあるのだ。

<次回へ続く>

ヤマボウシに寄せて

木原生物学研究所「木原記念室」名誉室長 木原 ゆり子

本誌に一年半にわたって「木原 均小伝」を書かせていただいたが、このたび冊子にまとめていただいて、思いがけず多方面の方々に読んでいただく機会に恵まれた。今年は、父に縁のある組織が一斉に節目の年を迎え、さまざまな記念行事が行われて、父を知る多くの方々が参集されたからである。そして、いずれの行事にも、父が最も愛したヤマボウシの花木が関わっているのので、今回はヤマボウシにまつわる話を述べたい。

父が亡くなったのは1986年だったが、生前に財団法人木原生物学研究所を解散して横浜市立大学に寄附していた。新研究所は、横浜市南区から戸塚区に移転したが、建物を囲むように野生のヤマボウシが植えられ、毎年それぞれ形の違う野趣に富んだ「花」を咲かせている。

今年は、横浜市立大学の附置研究所として30周年を迎え、記念講演会が催された。講師は、国立科学博物館名誉研究員・樹形研究会代表の八田洋章氏で、「木原 均博士との出会いとその後の研究～ヤマボウシ研究から芽生え、フェノロジー研究へ」と題して、父との出会いから始まったヤマボウシ研究とその後の展開について語られた。

また、新研究所とほぼ並行して創設された木原記念横浜生命科学振興財団も、横浜市鶴見区で30周年を迎えて、記念植樹式が行われた。植樹には財団のシンボルフラワーとなっているヤマボウシが選ばれ、参加者には記念品として「木原博士が愛した花たち」のカード一組が贈られた。

父とヤマボウシとの出会いは、京都大学から静岡県三島市の国立遺伝学研究所に勤務先が移ったことに始まる。国立遺伝学研究所は箱根に近く、そこには見事なヤマボウシの原生林があった。関西では見られなかったヤマボウシの花に魅せられて、父は箱根に頻繁に通うようになった。



ヤマボウシ 撮影は木原ゆり子さん

勤務地が変わるとともに、1955年、木原生物学研究所も住まいも横浜市に移し、亡くなるまで30年を過した。父の死後、研究所の跡地は「横浜市こども植物園」となっているが、今夏、横浜移転60周年を記念して、「コムギの木原 均博士と『小さい実験』」という企画展が行なわれた。

『小さい実験』とは、ライフワークのコムギの研究のかたわら、日々の暮らしの中で父が楽しみに行っていたルーペとノートと鉛筆があればできる実験である。『小さい実験』の一つにヤマボウシの花の変異の調査もあった。自宅周辺にヤマボウシを植え、個体別の観察を続けていた。

植物園になってからも、ヤマボウシは木原 均ゆかりの樹として数を増し、園内の丘の上にある「木原 均 研究の地」の記念碑の傍らにも、株立ちの若いヤマボウシが植えられている。

父とともに北大の植物園を訪れたことがある。折しもヤマボウシの花の季節であった。

結びに、高橋暁吉氏の歌集「四照花」から父が選び、墨書して壁に掛けていた一首をここに紹介したい。

晴曇とともにかなし^{やまぼうし}ぶ四照花の
一木を持ちて老い果つらむか

木原 均先生と北大野球部

北大野球部 OB 会会長 荒川 義人（農学部昭和 50 年卒）

6 月末日、北海道大学総合博物館を訪ねた折、木原 均先生のご功績の展示を拝見し、野球部の大先輩であることをお伝えしたところ、お嬢様（木原ゆり子氏）による小伝（本紙抜粋特別号）を頂戴し、興味深く拝読いたしました。とくに「②スポーツマンの顔」では、『部史』（1938）に記されている野球部時代の足跡がご紹介されております。ここでは、その『部史』後の偉大な先輩と野球部の関わりについて紹介させていただきます。

北大野球部は 1901 年創部ですが、日本の野球事始め諸説の中に 1873 年開拓使仮学校で初めて野球をしたとする説があり、わが国の“野球のルーツ”としての誇りも大切にしております。野球部として 2000 年に 100 周年を迎え、記念事業として『100 年史』を発刊いたしました。その『100 年史』にも、木原先生のご活躍ぶりが記されています。1913 年 6 月 27 日の対北海中戦では、新人でありながら二塁打 2 本を放ち、当時「鬼」キャプテンと異名の渡瀬投手の快投を援護した、とあります。木原先生ご入部の少し前に社会人チーム函館太洋倶楽部が誕生し、また、小樽高商（小樽商科大学）

とは『北の早慶戦』と称された定期戦が始まりましたが、いずれのチームとの試合でも、守っては投手として、あるいは三塁手、時には外野手として、打ってはほぼ全試合を四番打者として、大活躍されています。当時を知る OB からの伝承では「三塁木原、遊撃佐藤のコンビは、長嶋・広岡のようであった」とありますし、函館太洋倶楽部に勝利した際に報じられた「木原投手の正鶴なるコントロールと不可思議の緩球には太洋の乗ずる隙はなかった」の記事は小伝でもご紹介されております。まさに北大野球部の『大黒柱』としてのご活躍ぶりが窺えます。

1975 年、私は農学部を卒業して大学院に進み、恩師である今宮明男先生（元北大野球部部長・監督）の命により現役の指導に関わるようになりました。当時、40 年に及ぶ時間を北大野球部と共有することになるとは予想しませんでした。

その翌年の 1976 年 9 月、『北大創基 100 年』の記念行事として、OB 紅白試合が行われました。その始球式が、82 歳を迎えた木原 均先輩—佐藤清先輩の往年の名バッテリーで行われました。北



「北大創基 100 年」記念行事としておこなわれた北大野球部 OB 紅白試合にて 1976(昭和 51)年 9 月 16 日
82 歳の木原 均 - 佐藤 清のバッテリーで始球式をした
中列左から 5 人目で腕を組んでいる木原 均 OB、その右隣が佐藤 清 OB、最後列左端が筆者の荒川義人 OB
写真提供：新野幸男氏 野球部 OB 昭和 29 年卒 前列右から 2 人目

大野球場に集う OB の皆さんが、いかに感動したか、お分かりいただけるとと思います。その後に、OBの皆さんでバックネットを背景に写真を撮影しましたが、中央で木原先生が腕を組んでおられ、私は最後列左端にあります。

私に木原先生の偉大さを伝えてくださった今宮先生が、1987年2月に記された『北大野球部々報』の原稿で、前年に他界された木原先生への追悼の思いを述べられていますので転載させていただきます。今宮先生の胸の内にある大きな水泡が消えたという書き出しに続き、「遺伝学の世界的権威 K. Kihara というよりは、私にとっては野球部の木原大先輩という方がむしろぴったりする。北大に来られるとき、いつも野球部長の犬飼先生から御連絡を頂戴して、貴重なお時間を割いていただき、

親しく御教示、御叱責をいただいたこと、そしてお亡くなりになる半年程前、長男廉ともども横浜の木原生物学研究所に伺って、長時間にわたって昔話を録音させていただいたこと、そのさい、齡90を越えるにもかかわらずかくしゃくとして歩まれ、御自分で育てられた椎茸をとってお土産に下さったことなど、はなはだ失礼ながら、こわくもあり、慕わしくもある大きな水泡だった。」と記されています。

残念ながら、その今宮先生も2003年に他界されましたが、北大野球部の現役選手とOBをつなぐ立場にあります私の使命として、木原先生が青春時代に野球部で培われたものを、良き伝統として受け継いでいきたいと思ひます。

(天使大学看護栄養学部栄養学科教授)

博物館訪問記

横浜市こども植物園訪問記

植物・図書ボランティア 星野 フサ

「コムギの木原均博士と『小さい実験』」の展示が開催されているというので、木原ゆり子さんの案内で横浜市こども植物園に行ってきました。

この植物園（横浜市南区六ツ川）は、木原博士の研究所跡地で、1979年に国際児童年を記念して開園されました。木原博士は、1955年に京都から木原生物学研究所をこの地に移し、亡くなるまで研究生活を送っていました。

展示タイトルの『小さい実験』とは、木原博士がコムギ研究のかたわら続けていた“ルーペとノートと鉛筆”があればできる実験で、日常生活の中でふと見つけた疑問を解き明かすことの楽しさを子供たちに伝えたいと思っていたものです。

展示室に入ると、タネナシスイカの果実(形は丸くこちらのデンスケスイカに似ていた)とタネナシスイカの花粉親(こちらで見たことのないラグビーボール型で長径は50cm位)が床に並べられていて感動しました。パンコムギとその両親の全草立体標本からは、パンコムギの祖先種タルホコムギを発見された木原先生の迫力が伝わってきました。また、アサガオやツルニンジンなどの巻き



木原ゆり子さん 「木原均博士 研究の地」記念碑の前にて
2015年8月8日

方の展示パネルの下には実物の鉢植えが置かれていて展示作業の苦勞がしのげられます。

園内にはエジソンが発明した電球に使われた京都男山のマダケが植えられ、あの有名なゴッホのヒマワリゆかりのヒマワリが咲いていました。ニュートンの万有引力発見にヒントを与えたリンゴの木には実がなっていました。

羽田からとても便利な場所にありまますので、秋にまた訪ねて92品種もあるカキを眺めたり、メタセコイアの紅葉を見たいものです。

活動報告

平成遠友夜学校 学習支援 卒業生徒の声

酪農学園大学 1年 佐藤 悠

初めて学習支援に行かせていただいたのは高校3年の8月だったと思います。初めは母の勧めで行きました。受験生でしたが、塾や予備校に行っていないことに加えてなかなか結果の出ない私を心配してくれたのでしょう。

ですが、最初は学習支援に行くことにあまり乗り気ではありませんでした。

というのも、私はそれほど人付き合いや知らない人と話すのが得意ではなく、知らない人に質問しながら勉強する自信がなかったのです。

しかし、何度か行くうちに学習支援に行くことがあまり不安でなくなっていました。

周りが静かだったおかげでしょうか？あまり人目を気にすることなく勉強することが出来たのです。

最初に心配していた知らない人と話すことや、質問することができるか、という心配も一応はなんとかなくなっていたと思います。むしろ自分は初対面の人とでもなんとか話すことができるということに驚きました。

そして秋も終わりに近づく頃にはすっかり行くことが楽しみになっていました。

冬になり、センター試験が終わった後からは大学の一般試験の勉強と、その間も勉強をみていただいたり励ましてもらったりしながら一般試験までの短い毎日を過ごしました。当日は不安もありましたが、焦ることなく実力を出せたと思っています。

最後になってしまいましたが、私が大学に無事に合格してここまでくることができたのは学習支援の時に励ましていただいたり、教えてくれました学習支援の先生方のおかげです。本当にありがとうございます。

<補足>文責：小山田伸明（北大理学部3年）
昨年度の平成遠友夜学校、学習支援には開始年度ということもあり20人近い応募が来ていました。しかしその中で、実際に半年以上通った学生は10名程度しかおらず、今回寄稿をお願いした佐藤さんはその中の1人でした。

佐藤さんはいつもマスクをしていてちょっと内気そうにみえました。しかし、熱心に週2回ほぼ毎回のよう学習支援に来てくれて、黙々と勉強をしたり、時にはほとんど質問をしたりと、まさしく、勉強に一生懸命励んでいる姿に私の方が勇気付けられました。当時は「成績があまり良くない」と大学受験に不安を抱え、いつも自信が無さげでしたが、ふたを開けてみればしっかり第一志望に合格をしていたのですから、やっぱりすごいことです。

学習支援を始めて早々、受験生を持って心配も大きかったのですが、無事に大学にも合格し、自分の好きな牛のこともやれているようで、本当に嬉しく思います。是非ともまた平成遠友夜学校に足を運んで、今度は教える側になってくれることを願っています。

∞∞ 学習支援 ∞∞

2014年8月より始まった高校生向けの勉強の支援活動です。本誌37号に紹介記事があります

日時：毎週火曜日・木曜日 6時～

場所：遠友学舎

費用：無料(平成遠友夜学校ボランティア活動)

指導者：平成遠友夜学校教頭、および、北大生を中心に、その他の大学生

出前「平成遠友夜学校」 苫前町での「寺子屋」

北海道大学理学部 3年 小山田 伸明

去る8月6日～8月9日、平成遠友夜学校教頭および学生有志は苫前町にて中学生・高校生の学習をサポートする「寺子屋」に行ってきました。

「夏休みだけでも北大生が子供の学習サポートをしに来てはくれないだろうか？」昨年、平成遠友夜学校の生徒の石川満壽夫さん(博物館資料部研究員)が、知り合いの苫前町町長、森 利男さんから相談を受けた事からこの企画は始まりました。

「苫前町には塾も家庭教師もない。」、それが苫前町という地方の小さな町の現実でした。

この話と時を同じくして、平成遠友夜学校では「学習支援」を始めました。そもそもの新渡戸稲造が創設した「札幌遠友夜学校」は、貧しく仕事があつて学校に通えない人のための無料の夜学校でした。私たちの学習支援はその精神を受け継ぎ、教育格差に翻弄される高校生を大学生が手伝うというものです。背景には日本における貧困率の増加があります。最も顕著にその影響が出ているのが10代の世代で、自分の学費を稼ぐアルバイトのために放課後は勉強ができない、一人親家庭で家に余裕のない、といった高校生が近年増加しています。家庭の所得が、教育に色濃く反映されると言えます。今、学習支援をやることはまさに本来の遠友夜学校の精神そのものであると思われました。そんな想いと共鳴し苫前での「寺子屋」についても快諾したのでした。

苫前町での「寺子屋」でまず驚いたのは、教育格差というものがあるのだと実感したことでした。お金がないのではないけど、その場所に住んでいるだけで、他の地域の学生から出遅れてしまうという現実があつたのです。

と言うわけで苫前町で行うことになった出前平成遠友夜学校ですが、交通費・宿泊費・食費は苫前町が負担してくれることになりました。というのも遠友夜学校では「報酬を頂かない」ことを条件に引き受けたので、それならば、ということで



寺子屋風景

苫前町での生活は保障してくれたのです。

苫前町には学年も所属も違う北大生6名で行きました。今回の学習サポートでは学校の勉強を伝えることは勿論、もっと本質的なもの「勉強の意味」あるいは「自分の将来について」ヒントになるものを伝えたいという思いがありました。それぞれが自分にとっての学問を語り、そして自分の歩んだ道について話すこと、それは苫前町の中学生・高校生には間違いなく新鮮であつたと信じています。僅か4日間の間でしたが、宿題を教えるのみならず、確かなものも残せたと思います。

その学習サポートの中で私達が感じたことがあります。それは「最初のきっかけさえあれば後は自分でできる」という仲間の一人が反省会で発した言葉でした。それは勉強の本質であり、本来そうあるべきものです。しかし、苫前町ではその機会が学校以外にはない。それでは少しでも「ニガテ」を感じた人はどうすればいいのか。学校教育で子供全員が養われねばならないものが、学校以外の場所でそれも余計にお金をかけなければ得られない。これについては考えさせられました。子供は夢中に生きている。しかし社会構造の中の教育格差によって不利にならざるを得ない。これはやはり異常な事態であると自分達には思えました。

さて「寺子屋」がどれほどの効果があつたものかはわかりませんが、少し年上の先輩という立場からあの子供達の力になれたらと願うばかりです。「学問より実行」の名の下に彼等の心に確かなものを残せたのであればこれほど嬉しいことはありません。

“お宝新聞” 教材化への飛躍

図書ボランティア 久末 進一

博物館の耐震工事に伴う移転で、図書ボランティアも同館 3 階共同研究室 (N309) に引っ越し、新たな活動拠点で毎週金曜日午後の活動日に、当面の課題となった明治・大正・昭和初期にさかのぼる実物“お宝新聞”紙整理と保存作業に、総力をあげて取り組んでいます。

本誌 37 号で既にタイムカプセル的信息媒体としての重要性を紹介したところ、多くの研究室内での標本梱包新聞類も再発見されて寄贈を受け、感謝しています。現物新聞は全て特製ファイル保存の上、共同研究室奥の整理棚に収蔵しております。興味のわいた方は、どうぞのぞきに来てください。

なにしろ紙媒体で 100 年以上もの歳月を耐えるのは無理なことで、当面、収集紙の破損防止を急がねばならず、とりあえずセロテープ補修で、紙面記事の解読可能なまでに復元します。これを収蔵台帳に記録、パソコンにデータ保存しています。

まず、この「資料化」の手続きを終え、報道記録媒体として事件・事故、世相、暮らしに及ぶ出来事、政治・プロバガンダ媒体として時代を動かした思想や人物の活動、広告媒体として消費をうながした時代の美意識などをテーマに、収集紙の脈絡のない情報の集積から該当する記事を掘り出す“宝探し”が始まるのです。

既に 100 紙にわたる新聞紙の種別は判明していても、時系列で一貫しているものは無く、断片的であるがゆえに記事からテーマをたぐり寄せるのは困難です。逆にあらかじめ仮設定したテーマを実証する記事を探すわけです。果して発見できるかどうかは時の運、やってみなければわかりません。

これら紙面の写真撮影・デジタル化を進め、映像による各テーマ該当紙面を見直し、記事を読み



整理中のお宝新聞

直してみる機会をもつのも必要なことではないかと思えます。特に明治・大正期の珍しい新聞を、テーマに添って展示公開できれば、その魅力を再認識できると思うのです。現在はその準備段階です。

現代との比較文化資料として、教材化されて活用されるためには、蓄積した量から質的向上をめざさなければなりません。つまり、多分野にまたがって多種多様な研究テーマに応用可能な新聞だけに、雑多な情報に埋没させられる危険もあります。読者各自が自らの興味を深め、自らのテーマを絞り込んでいかなければ、“お宝新聞”は、やはり、ただの古新聞紙にとどまるだけです。

飛躍のためには、新たな価値を見つけようとする情熱が欠かせないのです。

こうしたささやかな図書ボランティア活動に、諸先生方、ボランティア仲間の皆様の御理解と御協力をお願い申し上げます。

お知らせ

ボランティア・グループ活動拠点

ボランティアの会事務局長 沼田 勇美

北大総合博物館の耐震工事は第 2 期工事にはいり、閉鎖部分が設けられ館内が大きく様変わりしました。北館部分と南館部分が交通途絶して不自由になりました。北館 3 階に教員室はまとまっています。

また、総合博物館事務室は 1 階の N111A です。

耐震工事は 2016 年 7 月には、終了するようです。

現在把握しているボランティア・グループの活動拠点は、下表のとおりです。

ボランティア・グループの活動拠点一覧

グループ名など	部屋番号	グループ名など	部屋番号
在田ボランティア会長	N116	平成遠友夜学校	遠友学舎
植 物 標 本	N311C	ポプラチェンバロ	北図書館近辺の情報館
菌 類 標 本	N311C	図 書	N309 (共同研究室)
昆 虫 標 本	N314B	第 2 農 場	第 2 農場
地 学	N106		

<お願い>

上の一覧表には、他のグループの活動拠点の部屋が多々抜けているものと思われるのでお気づきの人は、下記編集委員にお知らせ下さい。

平成遠友夜学校へのお誘い

平成遠友夜学校は北大の先生や学生、一般の方の講演を通して、学生・市民が共に学びを深める場です。興味のある方もない方も、北海道大学の内と外をつなぐ貴重な機会ですので是非おこしく下さい。

毎週火曜日（祝日は除く）18時 15分から 20時 30まで 事前予約不要・無料

北海道大学 遠友学舎にて（北 18 条西 6 丁目）

校長：藤田正一（北海道大学獣医学研究科名誉教授）

教頭：北海道大学の学生

講義日程は HP・Facebook に記載 メール：enyuyagakko@gmail.com

北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース No. 38

- ◆編集人：北海道大学総合博物館ボランティアの会（編集委員：星野、今井、大山、児玉、沼田、山岸）
- ◆発行人：在田一則
- ◆発行日：2015 年 9 月 1 日
- ◆連絡先：〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目 Tel: 011-706-2658
- ◆ボランティア ニュースは、博物館のホームページからもご覧になれます。 <http://www.museum.hokudai.ac.jp>